

## 20240917 尾瀬を通して感じる、考える

私は、昭和の最後の年に教員になりました。当時は初任者が珍しく、とにかく私は、厳しくも大事にされました。算数の研究会に誘ってくださったのも初任校の先輩でしたし、バレーボールをやったこともなかった私に、パスの基本から教えてくださったのは、PTAのお母さんたちでした。校長先生は、とにかくお酒がお好きで、気持ちがよくなると場所を選ばず尺八をふかれました。

そんな初任校の教務主任の先生は、無類の山好きでした。当時、放課後は、ほぼ毎日何かしら教員スポーツ大会に向けての練習をしていました。バレーボール、野球、テニス、サッカー、バドミントン、卓球、水泳と区の大会は表彰状を逃すことがまずないほどの体育学校でした。そして、放課後汗を流した後は、ほぼ必ず懇親会となりました。こうした場で、私は教務主任の先生から、山の話の繰り返し聞かせていただきました。

様々な山の話の中で、何度も出てきたのが「尾瀬」でした。見渡す限り広がる湿原と背後にそびえる至仏山、雪解け水とともに咲くミズバショウ、夏はニッコウキスゲ、秋は一面の草紅葉と、当時全く山に興味のなかった私でも、何となくいつてみたいなど、思わずにはいられませんでした。ある日の懇親の時「今年も長蔵小屋に泊ってきた」と、尾瀬の自然を守った平野長蔵とその子・長英、孫の長靖の話をしてくださいました。

「いいか、こんなに素晴らしく貴重な尾瀬だけど、この景観が今こうしてあるのは、決して当たり前ではないんだよ。」

と、尾瀬の自然保護にまつわる話をたくさんしてくださいました。

明治から昭和にかけての近代化の流れの中で、尾瀬一帯がダムの底に沈みそうになった話。平野長蔵さんが、尾瀬沼の畔に山小屋を建てて、人も通わぬ豪雪の尾瀬で冬を越し、ダム建設に反対した話。

戦後、観光道路建設計画に対して、命をかけて反対した平野長靖さんの話。

当時の6年生の国語の教科書（光村図書6年：平成4年度版、8年度版、12年度版）には、「守る、みんなの尾瀬を」という読み物教材が掲載されていました。この教務の先生は、ほぼ5、6年専科とも言う人でしたから、この教材を繰り返し、繰り返し学級のこどもたち

に指導していたことでしょう。もちろん、私も親しくこの教材で何度も授業をしました。若手の先生の中には、実際にこの読み物教材で学んだ人もいないのでしょうか。

この「守る、みんなの尾瀬を」は、尾瀬沼の畔に立つ「長蔵小屋」を拠点に、三代にわたって尾瀬のかけがえのない自然を守るために一生をささげた人々について語った伝記的作品です。

「自然か人間かではなく、自然も人間も共に守らねば。(平野長靖)」  
の信念で、尾瀬を守り、後世に伝えようとした生きざまが、描かれています。

36歳という若さで亡くなった平野長靖さんの墓碑には、こんな言葉が刻まれています。

“ 守る  
峠の緑の道を鳥たちのすみかを  
みんなの尾瀬を  
人間にとって  
本当に大切なものを “



尾瀬は、尾瀬自体のもつ広く、深く、温かい魅力に溢れています。理屈を超えて、自然のもつ力や豊かさを実感できる場所です。ですから、訪れること自体に、とても価値があると思います。

その上で、私が、移動教室で子どもたちに感じ、学んでほしいと願ったのは、この自然がこうしてここにあるのは「決して当たり前ではない」ということです。そして、尾瀬を守り伝えようとした人たちの生きざまを学ぶことを通して、「何が本当の豊かさなのか」と、自分なりに真剣に考えるということです。

「これからどういう人になっていきたいか」「どういう未来をつくっていきたいか」と子どもたち一人一人が考えるとき、人と自然の共生について命をかけて考え、行動した人の生きざまは、かけがえのないロールモデルとなるだろうと思います。

